



国語問題紙

経営学部 1 部（経営情報学科）

法 学 部 1 ・ 2 部

2024 年 2 月 11 日

11 : 50 ～ 12 : 50（60分）

注 意 事 項

—— 注意事項は裏表紙にもある。問題紙を裏返して必ず読むこと。——

1. 国語の問題紙は全20ページである。
2. 解答用紙は問題紙の中に折り込まれている。
3. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
4. 試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

試験終了まで退室してはいけない。

5. 受験番号の記入については裏表紙を参照すること。

中学や高校の勉強では、ずいぶん暗記をさせられた。歴史の年代や英単語、化学の元素記号など、暗記しなければならないものは、山ほどあった。正直言って、暗記は好きではなかった。数学の問題を解くほうが、よほど楽しかった。暗記は、さして意味もわからずに、ただ繰り返し覚えるだけだから、そう楽しいものであるはずがない。どうしてこんなにもたくさん暗記しなければならないのか。そう思うことがたびたびあった。

意味もわからずに、ただ暗記しても、しょうがないだろうと思われがちだが、じっさいは、結構、暗記は役に立つ。中学のときの世界史で、中国の歴史を習うとき、まず、最初に歴代王朝の名称を丸暗記させられた。殷、周、秦、漢、隋、唐、……。それぞれの王朝がいつごろなのか、どんな時代だったのか、いつさい知らずに、ただただ覚えた。そんなことをして何になるのだらうと思ったが、王朝の名称と時代順が頭に入っていると、そのあと学んだ具体的な事象を整理し、一ボウするのにすぐ役に立った。中国の壮大な歴史の全貌を頭のなかで一挙に思い浮かべてみるのは、なかなか爽快なものである。何十年もまえのことなので、もうはつきりとは王朝名を思い出せないが、あのとときの爽快感だけは、いまでも明瞭に残っている。

日本人初のノーベル賞（物理学賞）の受賞者の湯川秀樹も、幼いころから漢文の素読を祖父にやらされたそうである。漢文の素読とは、意味がわからないまま、ただ漢文を声に出して読むことである。たとえば、「北の冥に魚あり。其の名を鯉と為う。鯉の大いさ、その幾千里なるを知らず。化して鳥と為るとき、其の名を鵬と為う。……」（『莊子』）と声に出して読む。意味もわからずに、ただただ読む。それは湯川少年にとってなかなかつらいことであつたようだが、その後、大人の書物を読み始めるときに、おおいに役に立ったそうだ。漢字への慣れにより、文字への②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿抵抗がまったくなくなったのである。

このことに関連して、「単純提示効果」という面白い現象がある。同じものに何度も接していると、それを好ましく感じるようになるという現象だ。意味のわからないもの、たとえば無意味な綴り（Krnwixのようなもの）でさえ、とにかく何度も接していると、好感度が増してくる。人間は馴染みのないものには不安を抱き、慣れ親しんだものには安心感を抱く傾向がある。広告を繰り返すのも、この人間の心理を利用している。

お坊さんになる人はよく經典の暗誦を行なう。「……色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是……」（『般若心経』）。

漢文を書き下すこともなく、じかに音読みする。もちろん、意味はわからない。それでも、ひたすら繰り返し読み、おのずと暗誦していく。このような一見、無意味にみえることが、あとで經典の内容を学ぼうと、すこぶる役に立つ。全文が頭に入っていることで、各部分の理解がヨウ易になるのだ。

これと似たようなことは、私の専門の哲学でも起こる。哲学を勉強しはじめたころ、哲学の本は難解なので、なかなか最初から順に理解していくことができなかった。理解したい箇所につつかると、とりあえずそれを読み飛ばしてつぎへ進んでいくしかない。そうすると、そのつぎの部分の理解が十分でなくなる。I、仕方ないから不十分な理解のまま、さらにさきへ読み進めていく。すると、またしても理解したい箇所につつかる。このようなことを繰り返していると、そのうちほとんど意味がわからなくなり、もう読み進めることができなくなる。こうして途中で挫折する。しかし、挫折したままでは、哲学書全体の理解は叶わぬ夢になってしまう。

大事なことは、理解しようなどと思わずに、とにかく全文を読みきることだ。¹ なまじ理解しようと思うから、理解できなくなると、挫折する。最初から理解を求めなければ、最後まで読みきることができる。意味がわからなくても、文字面だけでも結構楽しいものがある。それを頼りにとにかく読む。そして繰り返し読む。もちろん、そうしたところで、わからない箇所が多すぎるから、「読書百遍意自ずから通ず」というわけにはいかない。それでも暗記するくらい繰り返し読んでおけば、そのあと必死の理解を試みることで、何とか理解できるようになってくる。理解できないまま全文を読みきることが理解に至る必須²の条件なのである。

II、数学はひとつずつ順に理解していける。いやむしろ、そうやって理解を積み上げていかないと、全体が理解できない。このような場合には、意味もわからずに全体を暗記する必要はない。しかし、哲学のように、順に理解していくことができないものもある。各部分がわかって全体がわかるのではなく、全体がわかってはじめて各部分がわかる。このような場合は、A 必要がある。それが理解に向けての出発点なのだ。意味を気にせず、とにかく声を出して読む。文字を絵画のように楽しみ、音を音楽のように楽しむ。これが理解へと至る要諦³なのである。

しかし、いまの時代、そう頑張つて暗記しなくても、ネットで検索すれば、必要な情報はすぐ手に入る。中国の歴代王朝も、漢文や經典のテキストも、哲学の古典も、検索すれば、直ちに閲覧⁴できる。わざわざ図書館に行く必要はないし、本屋を探し回る必要もない。情報がすぐ手に入るのであれば、それはいわば暗記しているのと同じではないか。理解を伴わない暗記は、情報をただ脳のなかに貯めこんでいるだけだ。脳のなかでなくても、すぐ取り出せるなら、ネットやパソコンの

なかでもよいのではないか。こういった意見もよく耳にする。

Ⅲ、いまのネット全セイの時代^④になって、暗記の価値は下がった。このことは認めざるをえないだろう。文字が発明されて、情報が文書として記録できるようになると、暗記の価値は大きく下がったが、ネットですぐ検索できるよ
うになると、暗記の価値はさらに下がったと言わざるをえない。しかし、それでも、暗記にはまだ重要な価値が残さ
れている。ネット検索ですぐ情報が手に入るといっても、暗記した情報を思い出すのに比べれば、かなり時間がかかる。
瞬時に思い出せる心地よさに比べて、ネット検索はまどろっこしい。余計な広告が表示されるから、なおさらだ。

Ⅳ、ネット検索では、理解に至る助けにならない。情報がネットやパソコンにあるだけでは、たとえそれがす
ぐ引き出せるとしても、情報はただそのまま蓄えられているだけで、何の変容も生じない。しかし、暗記していれば、理
解していなくても、情報は無意識のうちにいわば「整理」されていく。具体的にどのようなことが起こっているかはまだ
よくわからないが、暗記した情報のあいだに何らかのつながりが生まれてくる。たとえば、同じ言葉が異なる情報に含ま
れていれば、それによってその異なる情報のあいだにつながりができてくる。このように情報が「整理」されると、それ
がのちの理解の助けになるのである。

かりに脳を直接、ネットに接続できるようになれば、キーボードを操作したりすることなく、瞬時に検索できるように
なる。中国の歴代王朝は何だったかと思っただけで、歴代王朝が頭に浮かぶ。それは暗記した歴代王朝を思い出すのと
何ら変わらない。脳科学と人工知能研究では、キーボードをカイ^⑤さに脳とコンピュータを直接つなぐ研究がじつさいに
進められている。これをBMI（ブレイン・マシン・インターフェイス）とよぶ。この研究が進展すれば、いずれ暗記し
たことを思い出すのと同じような仕方、コンピュータのメモリに蓄えられた情報をすぐ取り出せるようになるだろう。

しかし、そうなくても、コンピュータのなかの情報はただ蓄えられているだけで、暗記した情報のように、時とともに
「整理」されはしない。「整理」されるためには、情報を蓄えたチップを脳内に埋めこまなければならないだろう。そうす
れば、チップ内の情報どうしや、チップ内の情報と脳内の情報とのあいだに何らかのつながりが生まれてくるだろう。そ
うなれば、チップ内の情報は「整理」され、暗記した情報と同じように、理解に至る助けとなる。

V、脳内に情報チップを埋めこむことには、倫理的な懸念がある。膨大な情報をいわば暗記できるからといって、
健常者に情報チップを埋めこんでもよいのだろうか。それは脳（それゆえ心）に取り返しのない損傷を与えることにな
るかもしれない。深刻な記憶障害のある患者にたいしてなら、ひとつの治療法として情報チップを埋めこむことも許さ

れるかもしれないが、健常者にそのような危険なことを行うのはいかなるものであろうか。

このような倫理的懸念はあるものの、情報チップの研究は進められており、いず⁵れ倫理的な懸念も克服されて、脳に情報チップを埋めこむ時代がやってくるかもしれない。そうなれば、ようやく私たちは暗記の苦役^eから解放されることになる。『ドラえもん』に「アンキパン」が出てくるが、これはノートや本のページの食パンを押しつけて、その内容を写しとり、それを食べると、書かれた内容を暗記できるという便利な小道具だ。この小道具のように、情報チップを脳に埋めこめば、その情報を覚えられという夢のような時代がやってくるかもしれない。もつとも、暗記が趣味の人にとつては、暗記の価値がほとんどなくなつて、いささか寂しい時代になるかもしれないが。

このような夢の時代がやってくるのは、まだもつと先のことである。技術の進歩が著しい昨今にあつては、何百年も先のことでないかもしれないが、少なくとも数十年は先であろう。それまでは、やはり暗記をせざるをえない。電卓が普及するまえは、筆算やそろばんで計算をせざるをえなかったが、それと同じように、情報チップの埋めこみが可能になるまでは、暗記は不可欠であろう。暗記の苦役は続くが、暗記の喜びを見つけることも可能だ。円周率の小数展開を何万ケタまで覚えている人がいるが、膨大な数の並びを一挙に脳裏に思い浮かべることができるのは、さぞ爽快なことであろう。嬉々^{きき}として暗記できるようになれば、それは人生の潤いのひとつとなる。

(信原幸弘『覚える^{おぼ}』と「わかる」 知^ちの仕組みとその可能性^{かのうせい}』による。ただし、一部変更した。)

問一 波線 a～e の漢字の読みとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

a	明瞭 ^{めいりょう}	ア	めいかい	イ	めいせき	ウ	めいりよう	エ	みようせき	オ	みようぎよう
b	必須 ^{ひつじゅう}	ア	ひつし	イ	ひつじよう	ウ	ひつじゆ	エ	ひつす	オ	ひつけい
c	閲覧 ^{えつらん}	ア	てんらん	イ	かんらん	ウ	えつらん	エ	じゆんらん	オ	かいらん
d	膨大 ^{ぼうだい}	ア	そんだい	イ	そうだい	ウ	じんだい	エ	ぼうだい	オ	せいだい
e	苦役 ^{くじやく}	ア	くじゆう	イ	くもん	ウ	くせつ	エ	くやく	オ	くえき

問二 二重傍線①～⑤のカタカナが表す漢字を含むものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

① 一ボウ

ア これはきつと敵の陰ボウに違いない。
イ 彼らは目の前で起きた事故を、ただボウ観していた。
ウ つまらないことで、一生をボウに振るな。
エ 一部の群衆はボウ徒と化してしまった。
オ 私には夢も希ボウもある。

② テイ抗

ア 川に沿って防波テイを作る。
イ 彼の努力は並大テイのものではない。
ウ 私の實力では、あの人には到テイかなわない。
エ 双方の対立が激化したので、第三者が調テイに入った。
オ 両国の間で講和条約がテイ結された。

③ ヨウ易

ア 英語の様々な慣ヨウ句を覚える。
イ 負担の重い仕事を任せ、動ヨウしている。
ウ 我々は少し休ヨウしたほうがよい。
エ 彼らの行為をヨウ認することはできない。
オ 彼は何をするにしてもヨウ領がいい。

④ 全セイ

ア 台風はセイ力を強めながら近づいている。
イ チームには選りすぐりのセイ鋭たちが集まった。
ウ テストの成績で目覚ましいセイ果を挙げた。
エ あの一族は、昔、隆セイを誇っていた。
オ これはセイ紀の大発見だ。

⑤ カイさず

ア 緊急のカイ議が開かれた。
イ 自分の車でも勝手にカイ造してはいけません。
ウ 事故で負傷した人をカイ抱する。
エ 彼は境カイ線を越えてやってきた。
オ パソコンを分カイして修理する。

問三 空欄Ⅰ～Ⅴに入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

Ⅰ	ア それでも	イ それゆえ	ウ それこそ	エ それとなく	オ それまで
Ⅱ	ア それにもかかわらず	イ それにたいして	ウ それゆえ	エ それだけに	オ それから
Ⅲ	ア とはいえ	イ ただし	ウ たしかに	エ ところで	オ 意外にも
Ⅳ	ア もちろん	イ だから	ウ しかし	エ しかも	オ それでも
Ⅴ	ア ただし	イ せいどころか	ウ だから	エ それにもかかわらず	オ さらに

問四 傍線Ⅰ「なまじ」はどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 生意気にも背伸びをして イ 目標に向かって生き生きと ウ できそうもないのに無理やりに
エ 大人ぶっているが幼稚に オ 望みがないのに一生懸命に

問五 傍線 2 「読書百遍意自ずから通ず」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 何度も繰り返し同じ書物を熟読すれば、わからなかった意味も自然とわかってくる。
 イ たくさんの書物を乱読すれば、わからなかった意味も自然とわかってくる。

ウ 何度も繰り返し同じ書物を熟読すれば、自分なりに意味が通ったものとして理解できる。

エ たくさんの書物を乱読すれば、自分なりに意味が通ったものとして理解できる。

オ たくさんの書物を何度も通読することは、それ自体が意味のある行為である。

問六 傍線 3 「要諦」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 概要となるところ イ 肝心かなめのところ ウ 諦めてはいけないところ

エ コツとなるところ オ 切り札となるところ

問七 空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 意味もわからずに全体を暗記する前に、各部分を順番に理解する

イ 意味もわからずに全体を暗記するくらい、何度も全体に接する

ウ 意味もわからずに全体を暗記する必要はなく、ひとつずつ理解を積み上げていく

エ 意味もわからずに全体を暗記するような無駄なことはせず、まず何度も文字や音として楽しむ

オ 意味もわからずに全体を暗記するだけでなく、各部分の意味を常に理解しようとする

問八 傍線 4 「暗記にはまだまだ重要な価値が残されている」とあるが、重要なのはどのような価値であると著者は考えているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア たとえば、中国の王朝名や円周率などを頭の中で一挙に思い浮かべると、ただ爽快感だけは感じることができるとい価値。

イ 無意味な綴りでも、繰り返し接することで好感度が増してきて、安心感を得られるという精神衛生上の価値。

ウ 自分の頭で暗記していれば、倫理的に問題のある情報チップを脳内に埋めこまれることを今後とも避けられるという価値。

エ 意味を気にせず声を出して暗記することで、文字を絵画のように楽しみ、音を音楽のように楽しむことだけできるとい娛樂的価値。

オ 理解していなくても、暗記した情報が脳内で無意識のうちに「整理」され、のちの理解の助けになることがあるとい価値。

問九

傍線5「いずれ倫理的な懸念も克服されて、脳に情報チップを埋めこむ時代がやってくるかもしれない」とあるが、それは多くの人にとってどのような時代だと著者は考えているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 脳に情報チップを埋めこむと脳を損傷するかもしれないという問題は解決されるが、暗記することの喜びが奪われてしまう寂しい時代。
- イ 脳に情報チップを埋めこむという技術的に困難な課題は解決されるが、暗記することの喜びが奪われてしまう寂しい時代。
- ウ 脳に情報チップを埋めこむと適合するかという心理的な心配はなくなるが、暗記することの喜びが奪われてしまう寂しい時代。
- エ 脳に情報チップを埋めこむと脳を損傷するかもしれないという問題も解決されることで、暗記をする必要がなくなる夢のような時代。
- オ 脳に情報チップを埋めこむという技術的に困難な課題も解決されることで、暗記する必要のなくなる夢のような時代。
- カ 脳に情報チップを埋めこむと適合するかという心理的な心配もなくなることで、暗記する必要のなくなる夢のような時代。

問十

本文で述べられている内容と合致するものには「ア」を、合致しないものには「イ」を答えよ。

- A ただ暗記することは情報を脳に貯めこんでいるだけであるから、理解を伴わない暗記は無意味である。
- B いまの時代は、ネットで検索すれば必要な情報は入手可能であり、暗記の価値が昔より下がっているのは事実である。
- C 今後、脳を直接ネットに接続することができるようになれば便利だが、それだけでは情報は蓄えられただけで「整理」はされない。
- D 情報を蓄えたチップを脳内に埋めこめば、チップ内の情報は「整理」されるので、記憶障害患者への治療法として有効活用すべきだ。
- E 将来、情報チップの埋めこみが可能になるまで暗記は不可欠だが、暗記自体に喜びを見つけることもできる。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

一 はじめに

消費は私たちの生活の中で大切な位置を占めている。¹ スポーツをしない人、料理をしない人、仕事に就いていない人はいても、消費をしない人は稀だろう。消費は誰もが当事者である。そこでこの連載では、私たちが日ごろ経験する消費や、消費に関連する事柄に焦点を合わせて、あれこれと考えていこうと思う。(ア)

この連載のねらいは単純である。主としてマーケティング領域の研究を紹介しながら、私たちの身近にある消費について、少しばかり考えるきっかけを提供することである。読者の皆さまには「へえ、なるほど」と楽しみながら読んでいただきたいし、「マーケティングって、そんなことも研究しているんだなあ」と知ってもらえれば、なおのこと嬉しい。

二 消費の研究

はじめに、社会科学の研究において、消費はどのように扱われてきたのかを調べてみよう。間々田(二〇一六、二〇一九)は消費を扱う学術領域として、経済学、社会学、マーケティングをあげている。(イ)

彼によると、消費について最初に明確な[A]を試みたのは経済学だという。経済学では消費がもたらす価値や意味を「効用」という概念によって扱ったが、議論の対象は私たちが生活をするうえで必要となる食糧や道具などの消費が中心だった。また当初は消費の内的意味や主観的側面に強い関心が向けられることが少なかったが、一九六〇年代から文化経済学が登場し、文化を経済学の対象とする動きもみられるようになった。

社会学ではヴェブレンによる顕示的消費論や、ボードリヤールによる記号的消費論が、消費を分析するための標準的な枠組みとなり、消費を「地位誇示のため、より高い階層への仲間入りの証としてなど、顕示的／記号的なもの」(間々田二〇一九、六頁)と考えることが多かった。しかし最近では、文化的消費(充実感、心地よさ、楽しさなどをもたらす消費)にも注目が集まってきているという。

マーケティングでは、消費をなんらかの目的を合理的に達成するための手段と捉えることが多かった。そこでは消費者が「基本的に実用的な価値、つまり機能的価値を実現するために、合理的に情報処理をするものと想定され」(間々田二〇一六、一五九頁)、研究が進んできた。しかし一九八〇年代に入ると「B 消費」という概念が提示され、音楽、

グルメ、スポーツ、ショッピングのような、消費それ自体が目的となる消費にも注目があつまってきた。今日ではこうした流れはCCT (consumer culture theory: 消費文化理論) といわれ、消費の社会的、文化的、象徴的側面に注目した議論が展開されている。

三 消費をめぐるいくつかの研究

ここまで間々田(二〇一六、二〇一九)の研究を参考に、経済学、社会学、マーケティングにおける消費の扱われ方について整理してきた。私はマーケティング領域の研究者だが、彼の主張には「なるほど」と思われるものがある。(ウ) マーケティングの教科書では「消費者のニーズを満たす」ことが大切だと指摘され続けてきた。しかしそこで論じられる内容は、過去と現在でかなり違う。かつては、汚れ落ちの良い洗剤や、より安全性の高い自動車など、消費者の目的を合理的に満たす製品を開発し、提供することの重要性が主として述べられてきた。そして提供された製品やサービスの品質の高さによって顧客を満足させることの大切さが指摘されてきた。もちろんこうした内容は間違っていないし、いまでも十分に通用する。しかし現代のマーケティングでは「価値を創造し提供する」ことに、よりいつそう焦点が合わせられている。顧客は実用的あるいは機能的な目的を達成するために合理的な意思決定をするばかりではないし、製品やサービスの仕様や特徴だけを客観的に評価しているのではないと考えられるようになったからである。

こうした流れを受けてマーケティングでは、消費について、³ 企業の視点にとらわれず、より自由に検討されるようになった。ある意味で、それらは私たち消費者の視点から、⁴ 消費について考えた研究といえるだろう。実際こうした研究は、私たちの日常生活と関連するものも多く、興味深いものばかりである。以下では、そうした研究をいくつか紹介しよう。(エ)

(1) 食品の消費

はじめに食品の消費を紹介しよう。「食べる」ことは生活の基礎であり、誰もが行うもつとも一般的な消費活動である。このためマーケティング領域でも、食に関する研究がいくつも存在する。

アメリカでは健康的なメニューの人気の高まるにもかかわらず、人々の体重が増加しているという。脂肪分の少ない健康的な食品の普及と、肥満率の上昇が並行して生じることから⁵ 「アメリカの肥満パラドックス」ともいわれている。そこでシャンドンとワンシンク(二〇〇七)は、なぜこうした現象が生じるのかに取り組んだ。驚くべきことに飲食店が「健康的」とうたっている場合、そうでない場合と比べて、主菜のカロリーを過小評価してしまい、知らず知らずのうちに、

より高カロリーの副菜、飲料、デザート注文してしまう。そしてその結果、健康的とうたっている店での食事の方が、より多くのカロリーを摂取してしまう。私たちは「野菜をふんだんに使ったヘルシーなレストラン」と掲げられていると、つい余計なものを食べてしまうようである。

こうした不思議な現象は他にもある。たとえばタンガリーら（二〇一九）によれば、健康的だと認識されているスナック菓子では、カロリー情報の表示の有無によって実際の消費量に違いが生じることはないが、不健康だと認識されているスナック菓子の場合、カロリー情報が表示されることで消費量が増える傾向にある。不健康だと認識している食品の場合、カロリー情報を見たときに「思ったよりも少ない」と感じる 경우가多く、これが消費量を増大させるためである。

C この現象は、カロリー情報をより重視する消費者（体重管理に積極的な消費者）ほど顕著だという。彼女らによれば、アメリカでは「一食あたり〇〇カロリー」と表示されていても、実際の一食よりも少ない分量で計算されていることが多い。やはり自分が食べる一食分のカロリーをきちんと把握することが大切なのだろう。

見た目の良し悪しも、食品の消費に影響を与える。ハーゲン（二〇二一）は、可愛らしく（pretty）見える食品ほど健康的だと判断される傾向があることを明らかにしている。ここでいう食品の可愛らしさは、秩序だつていて、対称的で、バランスがとれているといった古典的な美しさのことである。こうした美しさは自然を連想させ、健康的だと認識されることで、栄養が豊かで脂肪分が少ないという知覚をもたらす。この効果は、実験参加者に正確に判断するよう金銭的なインセンティブを与えた場合にも発生したことから、彼女は「金銭的な報酬がかかっているときでさえ、人は可愛らしさを無視できない」（二三八頁）と指摘するとともに、「食品の見た目の良さは不健康な食品に対する健康的な判断を誤らせることで、消費者に害を与える可能性がある」（二二九頁）と主張している。

見た目の美しさとは反対に、私たちには見た目の悪い食べ物を避ける傾向がある。グレワルら（二〇一九）は、安全であり、食べることができるにもかかわらず、美しくない野菜や果物を避ける理由について検討した。彼女らによると、社会心理学では人は自分自身の行動を観察することで自分について推論することが知られているが、こうした現象が食品の選択にもあてはまるという。つまり魅力的でない農産物を食べることを想像するだけで、自分自身をどう見るかにマイナスの影響が生じ、否定的な自己認識が高まるため、魅力的ではない農産物を購入する気持ちが低下するのである。ただしこうした現象は自尊心を高めることで D されるので、「あなたは素敵だ！ 見た目が悪い農産物を選ぼう！」といった店内メッセージを掲げることで対策が可能である。ちょっとした工夫でフード・ロスを減らすことができそうである。

(2) 月給制か日給制か

つづいて、もう少し違う角度から消費について検討した研究を紹介しよう。make or buyという言葉があるように、何かを手に入れるには自分で作る方法と、お金を払って購入する方法がある。しかし現実には、私たちはほとんどの消費を購入によってまかなっている。消費にはお金がかかるわけだが、無駄遣いを避けるにはどうしたらよいだろうか。

支出の額が、給与の支払い頻度によって変わらなければならないとした研究がある。デ・ラ・ロサとタリー(二〇二二)によれば、私たちは、自分の金銭的資源が必要となる支出と比べて十分であるかを予測することで、自らの主観的な豊かさを評価している。そして多くの場合、この予測に対して不確実性を感じ、それが主観的な豊かさの認識における重要な要素となる。具体的には、自らの金銭的資源が十分であることに確信を持ってないほど、主観的な豊かさは低くなる。⁹

彼女らは給与の支払い頻度が、この不確実性の感覚に対して影響すると考えた。たとえば月給制の人は月に一度しか収入がないが、その間にさまざまな支出をする。このため自らの金銭的資源が十分であるかの予測が不確実となる。これに対して日給制の場合、支出を相殺する収入が毎日得られるので、不確実性の感覚が低くなる。¹⁰

自分の豊かさを高く評価することになり、支出も多くなる。どうやら月給制と日給制を選べるならば、月給制の方が無駄遣いをしないで済みそうである。

(3) 幸せを感じる時

最後に¹¹ 幸せを感じる時について考えてみよう。最近のマーケティングでは、人々の幸せについての研究も多い。たとえばバタチャリーとモギルナー(二〇一四)は、私たちが日常的な経験(ordinary experience)と非日常的な経験(extraordinary experience)のどちらに幸せを感じるかを検討している。日常的な経験とは日々の生活の中で生じるありふれた経験のことであり、非日常的な経験とは日常生活の範囲を超えたところで生じるめつたにない経験のことである。研究の結果、若い人は非日常的な経験をしたときに幸せを感じるが、年齢をかさね、人生に残された時間が少なくな感じることが多くなるにつれて、日常的な経験が非日常的な経験と同じように幸せをもたらすことが明らかになった。歳をとると、娘の卒業式に参加することだけでなく、日曜日の夜に娘と一緒に食事をするにも幸せを感じるようになる、といった具合である。私たちが大切に感じる場面は、自分の持ち時間と共に変わるのだろう。(オ)

(久保田進彦「消費と私 第1回 消費をめぐる研究」『書齋の窓』二〇二三・三)による。ただし、一部変更した。

問一 傍線1「大切な位置を占めている」と著者が述べている理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 消費によって人々は自分の個性を表現しているから。
 イ 人々は自分の好きなように消費をしているから。
 ウ すべての人々が消費活動をおこなっているから。
 エ 人々は消費を中心とした生活を送っているから。
 オ 多くの時間を人々は消費に費やしているから。

問二 傍線2「社会科学の研究」に対する本文中の説明として適切ではないものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア マーケティングは消費者を自分の目的に対して合理的に行動する存在として仮定した。
 イ 経済学は人々の心理に注目し、消費は文化だという見方が主流になってきた。
 ウ 社会学は好ましい感情に繋がる消費にも関心をもつようになっていく。
 エ 経済学は当初、人々の生存にとっての必要性の観点から消費を検討した。
 オ 社会学は、人々が他者に対して自分自身を表現する手段として消費を捉えた。

問三 空欄A～Eに当てはまる最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- | | | | | | |
|-----|-------|--------|---------|-------------|-----------|
| 空欄A | ア 標準化 | イ 符号化 | ウ 抽象化 | エ 理論化 | オ 細分化 |
| 空欄B | ア 金銭的 | イ 古典的 | ウ 対称的 | エ 実用的 | オ 快楽的 |
| 空欄C | ア しかも | イ しかし | ウ むしろ | エ つまり | オ こういうわけで |
| 空欄D | ア 拡大 | イ 緩和 | ウ 認識 | エ 解除 | オ 修復 |
| 空欄E | ア 同様に | イ たとえば | ウ 結果として | エ それにもかかわらず | オ なぜなら |

問四 傍線3「企業の視点」に対する著者の考えとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 消費者が望む実用性を充足させることを重要視する従来の考え方に立つものであり、それは現在でも有効である。
 イ 消費者に機能的に優れた製品を提供することが企業の利潤に繋がるという信念であり、広く受け入れられている。
 ウ 消費者が求める新しい価値の創造や提供には適さないものであり、昨今、その観点を変えることが求められている。
 エ 消費者の利益よりも企業の論理を優先するという思想に立ったものであり、今日では認められないものである。
 オ 消費者のニーズは合理性に合致するものだと思なした過去の考えであり、現代の消費者には受け入れられない。

問五 傍線4「消費について考えた研究」がおこなっているのはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号

で答えよ。

- ア 日常生活の中で見られる消費者の行動はつじつまが合わないことを明らかにしている。
- イ 企業が提供する価値ではなく、消費者が自分の意志を優先することを示唆している。
- ウ 消費者のニーズが客観的なものから主観的なものへと推移していく過程を検証している。
- エ 日常生活の中での消費活動を重視し、新しい価値が創造する商品の開発を目指している。
- オ 消費が対象に対する消費者自身の捉え方によってどのように変化するかを調べている。

問六 傍線5「アメリカの肥満パラドクス」ともいわれている」理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 脂肪分の少ない食品の普及と同時に肥満率が上昇することは、アメリカでは珍しくないことだから。
- イ 健康的な食品の選択は摂取カロリーの減少に繋がるはずにもかかわらず、肥満率が高まっているから。
- ウ カロリーの低い食品を摂取することが人々の体重の減少に繋がらないことは予想できたことだから。
- エ 飲食店にとって健康的な食品の提供は集客面で有利だとされるが、そのような事例は起きていないから。
- オ 低カロリー食品の提供が高カロリー食品の消費を促進する原因は、マーケティングでは未解明だから。

問七 傍線6「不思議な現象」とあるが、傍線6のある段落に含まれる「不思議な現象」が起こる原因だと著者が指摘する事柄として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 体重管理に熱心に励む消費者であるほど、食品のカロリー情報に対して過度に反応する可能性が高いから。
- イ カロリー情報の提示の有無にかかわらず、食品に対する健康または不健康の認識が変化しないから。
- ウ 健康的なスナック菓子よりも不健康なスナック菓子の方が、カロリー情報が提供される傾向があるから。
- エ カロリー情報が提示されると、健康的な食品より不健康な食品のカロリーの方が低いと誤認されるから。
- オ 不健康だと認識される食品のカロリーに対する認識がカロリー情報に接することで下方修正されるから。

問八 傍線 7 「可愛らしく (pretty) 見える食品」について本文中で述べられている内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 自然由来の健康的な食品だと捉えられがちだが、実際には不健康な食品であることが多いと考えられる。
- イ 人々は可愛らしく感じる食品を健康的だと感じるが、その理由は伝統的な食習慣に従っているからである。
- ウ 好ましい食品という印象を与えるが、それは食品の内実を反映しないので人々の健康を損なうこともある。
- エ 豊富な栄養を備えたバランスのとれた食品だが、そればかり食することは不健康な状態に繋がりがねない。
- オ そのような食品に対して人々が感じる健康的だという認識は正確な判断を求める働き掛けにより修正できる。

問九 傍線 8 「私たちには見た目の悪い食べ物を避ける傾向がある」理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 行動観察により自己理解をおこなうが、人々にとって食事が最も重要な行動だから。
- イ 自己評価の低さが食品の見た目の悪さを通じて表面化すると人々は考えるから。
- ウ 人々にとって見た目の悪い食品を食べる行為は、周囲からの評判を下げるから。
- エ 自分が食べる食品の魅力の程度をもとにして、人々は自分自身を評価するから。
- オ 安全な食べ物だと言われても、人々は外観と品質は一致すると感じてしまうから。

問十 傍線 9 「不確実性の感覚」は何から生じるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 利用可能な金銭的資源が主観的な豊かさに依存する不安定さ。
- イ 自分自身の支出と金銭的資源との関係を見通すことの困難さ。
- ウ 金銭的資源の大きさが給与の支払い頻度によって変化する複雑さ。
- エ 支出額が必要性ではなく金銭的資源の制約で決まる不可解さ。
- オ 支出可能な金銭的資源の大きさが明らかではないという曖昧さ。

問十一 傍線10「月給制の方が無駄遣いをしないで済みそうである」と著者が述べている根拠として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で

答えよ。

ア 月給制の方が給与をもらう間隔が長いので、自分の豊かさを低く評価しがちだから。

イ 月給制の方が一度に手に入る金額が多いので、貯蓄に回す金額が多くなりがちだから。

ウ 月給制の方が収入の喜びを経験する回数が少ないので、主観的豊かさが低下しがちだから。

エ 月給制の方が一回の収入に対する支出の回数が多いので、支出を抑制しがちだから。

オ 月給制の方が収入を得る確率が低いので、収入を得られない期間が長くなりがちだから。

問十二 傍線11「幸せを感じるとき」について本文中で述べられていることとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 日常的な経験にも非日常的な経験にも価値があり、幸せを感じられることは素晴らしいことだ。

イ 若者は非日常的な経験に幸せを感じるが、老人は日常的な経験に、より大きな幸せを感じるようになる。

ウ 人々が感じる価値は人生の持ち時間に従って変化し、日常的な出来事にも幸せを感じるようになる。

エ 非日常的な出来事を感じる幸せが日常的な出来事のそれと同じではないのは、その内容に由来する。

オ 老人が日常的な経験にも価値を感じるのは、再びその経験をすることはできないと思うからだ。

問十三 本文中、(ア) (オ)の中で、左の文が入る最も適切な箇所はどこか。(ア) (オ)の中から一つ選び、符号で答えよ。

いずれも私が個人的に「面白いなあ」と感じたものである。

(こ の ペ ー ジ は 白 紙 で す)

(こ の ペ ー ジ は 白 紙 で す)

《注 意》

採点・集計などのさいに受験番号の読み間違いが生じないように、受験番号はつぎの点に注意して記入すること。

1. 受験番号は2箇所に入力する。
2. HBの鉛筆・シャープペンシルを使って、1マス1字ずつはっきり書く。
3. ほかの数字とまぎらわしくないように書く。

良い例	1	3	4	5	6	7
悪い例	1(7)	3(8)	4(6) 4(9)	5(6)	6(4)	7(1) 7(9)

それぞれ（ ）内の数字と誤解されやすい。